

陸自駐屯地紹介シリーズ 第28回

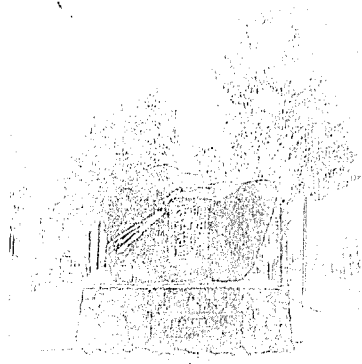
不撓不屈 名寄駐屯地

第3普通科連隊・第4高射特科群他

駐屯地シリーズ編纂委員会

国防りの歲月

5月の某日、名寄駐屯地取材を指示され、早速靖國偕行文庫に足を運んで陸軍時代の資料を探した。だがこの駐屯地には陸軍時代の歴史はなかった。警察予備隊発足当初から北からの脅威に対して何とか国の守りを全うしようという使命感を抱き続けてきた歴史がある。その途は開拓の連続であつた筈



近付正門駐屯地名寄

その過程では情熱の炎が燃えていた筈、その心の歴史と現在の様子に迫りたいと考えた。

名寄駐屯地への道

名寄市は旭川から北に約80km、羽田から約95分で旭川空港へ、空港から旭川駅へ35分、さらに特急で53分で名寄駅に着く。ホームに降り立って見回すと待合室へ抜ける改札口は漸く一人が通り抜けられるだけの広さしかない。おまけに引き戸で区切られている。この真冬の温度はマイナス20度以下になるという。待合室の客のためには引き戸は無くてはならないものである。並んだ椅子を取り囲むように土産物屋、弁当屋、出札窓口、旅行社が並び、待合室から駅前広場に向かう出口もガラス戸で区切られている。駅前50m程の交差点から3方向に伸びる幅広い道路がある。だがこの道路に面する商店は如何にも田舎町の雰囲気が強し、駐屯地へのアクセスは日中はタクシーに頼るしか無かつた。

田舎町にしては広すぎる片側3車線の道路も冬になると雪の壁で1車線になると云う。除雪も市の財政が厳しく、民家はタンブを頼むがその費用5千円の内、4千円を負担しなければならぬとも聞いた。運転手に名寄市の財政の厳しさを説明され続け、自衛隊が出ていって絶対困るとの発言を聞いた。タクシートの運転手までがこの様な意識を持たざるを得ない厳しい市政の現状を想像して複雑な思いに囚われた。更に、駅前から3kmも走った橋の手前のガソリンスタンドに目を引く文字があつた。「自衛隊の街 名寄」。今まで見たことも無かつた標記である。街を外れるに従い、民家が減り営門に続く長い道に入ると遙か先に一口で自衛隊施設と分かる建物群が見え、その後高い山が見えた。

駐屯地第一印象

営門前でタクシィを降りる。やや意外な光景があつた。殆どの駐屯地では営門の前の樹木は手入れされているところであるが、ここでは警衛所の建物が新しいのにその左側の広場が荒地のままなのである。轍の跡さえ残っていた。しかも国旗掲揚塔や本部庁舎などは更に進まなければならぬ。営門歩哨に来意を継げると係が迎えに来ると云う。迎えは車であつた。早速営門脇の荒れ地の理由を質問したところ駐

屯地拡張のため最近購入したばかりで新しい施設の基礎工事実施中とのこと、又営門は新築されたものであり、従来の営門はより隣舎に近いところにあつたことを聞いた。そこから本部庁舎に向かう道の右側に広い営庭があり、多くの隊員達が様々に活動していた。或るグループは教練の真っ最中、或るグループは座つて説明の最中、そして遙かに多いグループが、草刈りや地盤整備やらの作業の最中であつた。行動の合間合間に掛け合うかけ声や、指示に対する「了解」の若々しい声が耳に響いてきて、更に部外者の筆者が作業中の間近を抜けるに際しては作業を中断して黙礼を送ってくれるなど恐縮することではあつたが快いことでもあつた。「なにか有るのでですか」。事務次官の視察と駐屯地創立記念日が迫っているとのものであつた。また本部隊舎の入り口には当日の訪問者の二人の職名が書かれた札が下がつて、市長と市会議長が揃つて部隊訪問する事が示されている。この駐屯地が当面している地域との結びつきが並々ならぬものであることを物語っているではないか。

来し方のイバラ道

警察予備隊創設後間もない昭和26年12月に道北への部隊配置必要性が指摘されて調査が開始され、これに呼応して名寄商工会議所、名寄市議会が誘致

に動き、その後昭和27年12月に先遣隊が移駐し、28年3月宇都宮から第3連隊主力が、29年5月第62連隊第2大隊が秋田から移駐して駐屯地の概要が整った。しかし必要な機能が全て整ったの間は美に原野開拓の闘いの日々であった。町の中心から離れた未開拓の原野に駐屯地をゼロから建設したため、隊舎群の建設に付随して逐次移駐してきた部隊がまず直面したのは、駐屯地の環境整備作業という闘いであった。来る日も来る日も銃を土工具に持ち替えての作業が続いたらしい。第2代駐屯地司令には「土方連隊長」と渾名が付いたという。この駐屯地建設にあたって上下一丸になっての闘いを展開した事が偲ばれる。更に強敵、酷暑との闘いである。近年は名寄市でも零下20度以下に下がる事はないが、かつては珍しくなかったと聞く。水道は度々凍結断水しボイラーは運転を停止、そのたびに「入浴なし」となる。だが隊員はデスクワークで日を過ごしている訳ではない。連日ツルハシを振り、シャベルで掘るのである。汗と泥にまみれた体を少しでも清めるべくトラックに乗って町まで入浴に向かうが、帰り着く頃には体は冷え切っており、タオル等は堅く堅く凍り付いていたという。加えて食事などは凍り付いた漬物にお湯をかけ、冷えてしまったみ

そ汁を凍った飯にかけるなどして食べていた。寒風吹きすさぶ屋外に深い穴を掘った仮設トイレは南国出身者には思いもよらない事であったに違いない。それ故か、本州出身者が多分に自虐の笑いを込めて互いに交わす挨拶が「ここは人間の住む所でない」であったと記されている。

草創期を過ぎると隊務は施設建設作業主体の隊務から、様相を変えて災害派遣、部外行事協力、競技会支援などを含んだものが目立ち始めていったが、忘れてならないのは最大の目的、即ち、烈しい東西対立の厳しい渦の中の最初の防波堤を確立するための態勢整備が静かに続けられた事である。朝鮮戦争勃発以来我が国に指向された文化攻勢、言論攻勢、学生運動教唆、労働運動教唆、更には革命煽動とも云える様々な間接侵略が指向された年代において、油断すれば我が国への直接侵略は何時来てもおかしくない雰囲気であった。宗谷半島は海峡を隔てて、対岸に圧倒的戦力が展開し、空軍と空挺師団、機甲戦力などから、誰が見ても侵略的性情格を持つものと考えられていた。この状況の中で駐屯地の隊員は「前線部隊員としての覚悟」に無縁ではあり得ず「その時に備える厳しい訓練の日々」が続いていた筈である。故に名寄駐屯地司令、即ち歴代第3普

通科連隊長にはそうそうたる顔ぶれの人物が充てられ、隊員の充足率は優先され、自走砲、装甲輸送車など最新装備も真っ先に配備されたのであろう。その結果名寄駐屯部隊は、「国防の最前線」を担う「最精鋭の集まり」として育つたと云える。しばしば聞く言葉である。「彼らが第一次イラク派遣に選ばれたのは、彼らが精鋭であったからだ」。

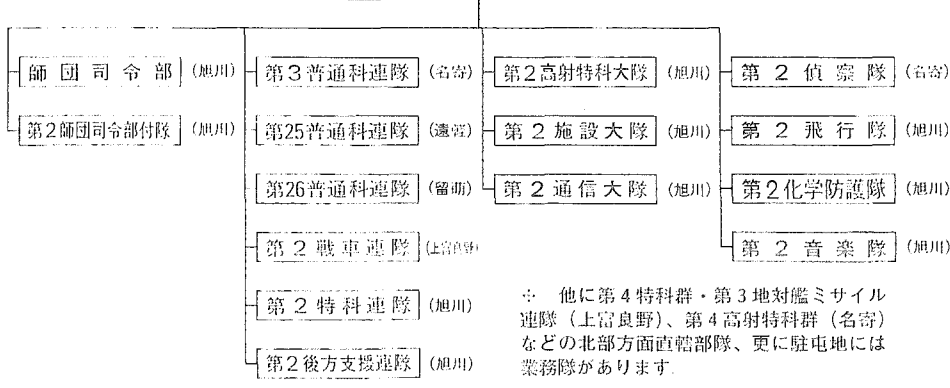
ラク派遣は日本として絶対に失敗出来ないことであった。だからまず日本一精鋭の名寄部隊を中心とすることを決めて、其処に最も優秀な隊長をもって来たのだ。だから成功したので。其

朝食、昼食抜きで部隊訪問見学を終えて名寄駅前に戻り食堂を探したが月曜定休日のこととて漸く探し当てたのが喫茶店であった。軽食を終え列車を待つ間、店の主人らしい男の話を聞いた。勿論当方の取材目的も、元自衛官であることも述べてはいない。地域の経済について「北海道独立論」なる当方が思わず警戒してしまふ論があった。しかし話が名寄自衛隊に及ぶと俄然「名寄市民」に豹変した。

「今、名寄の自衛隊が削減されると市は成り立ってゆかない。困る」の発言は市民として無理からぬ発言であったがその後に来た発言は晶原の引き出し丸出であった。い

《編成》

第2師団



※ 他に第4特科群・第3地对艦ミサイル連隊 (上富良野)、第4高射特科群 (名寄) などの北部方面直轄部隊、更に駐屯地には業務隊があります。

名寄駐屯地の歩み

保安隊移駐～国際貢献



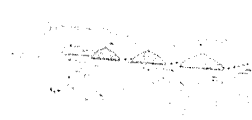
北勝館「名寄駐屯地の歩み」



保安隊の移駐
(昭和28年3月)



「第1次イラク復興支援群」
(平成16年)



移駐時の駐屯地



国際貢献「コラン高原派遣」
(平成18年)

「名寄駐屯地の歩み」は、保安隊の移駐、国際貢献「コラン高原派遣」の代表例が「名寄駐屯地隊区イラク派遣自衛隊員留守家族支援本部」主催の家族招待のイベントであり、主催者代表は、名寄市長・島多慶志氏であった。このことについて考えてみたい。自分の家族のイラク行きが地域の住民から烈しい反対を受ける心配もあった筈である。しかしこの心配は市長以下大多数の人々からの支持を意味する多くの行事を経て心配は霧散したのであるが更に留守家族慰問の心配りを聞いた現地派遣隊員はそれこそ心の底から安堵したに違いない。

隊員が任務を終え帰国に際して感激したものの一つに「駐屯地での出迎えた日があるという。旭川から名寄に着く頃は日暮り、隊員の列が出迎えたのであるが、その中に協力会、隊友会、父兄会、家族が並んでいた姿には涙ぐみ、ものを抑えるのに苦労したと云う。そしてその出迎えは三次に分かれた帰国の全てに同じく行われたのである。首長など職務にある人々の多忙さを考へるとその力のいれ具合が自ずと分かってくる。このような協力団体にはその活動の中心となっており、その中から一人を紹介したい。お名前を吉田美枝子氏と云い、ご主人は病院の院長であられた。ご夫妻共々、長い間駐屯地に対してご協力を頂いて来た方であ

「覚めている」と思えば「国を護る」ことが戦争に繋がると曲解した者達であった。名寄駐屯地でもかつて演習場往復の公道使用に異議を申し立てられ、或いは今に至るも大学演習林の中は防衛計画作成に資する偵察が出来ないことなど影響が有ったに違いない。しかし現在ではさしたるものではないようだ。それは、名寄駐屯地部隊隊区3市10町2村の殆どに、首長を会長とする協力会があつて、折りに触れ活発に活動しているからである。広報室長に聞いた。「一番心に残っている活動は？」「イラク派遣の支援です」。当然であろう。イラク復興支援群派遣に際

して、「派遣反対」の声はどこかに吹き飛ばし、盛大な壮行会があり、「無事帰還」を祈る「黄色いハンカチ」がはためいた。集められた浄財で、イラクの子供へのプレゼントが購入され派遣部隊に託された。子供達に笑顔でプレゼントを手渡す「日本陸軍」の雰囲気はその底に秘めた温かさを十二分に感じさせたばかりではなく、「日本人全体の優しさ」を顕して居たのでなかろうか。

また派遣隊員が遠くイラクにあつた間、不在中家族になされた様々な慰問のイベントがあつた。それらイベントの代表例が「名寄駐屯地隊区イラク派遣自衛隊員留守家族支援本部」主催の家族招待のイベントであり、主催者代表は、名寄市長・島多慶志氏であった。このことについて考えてみたい。自分の家族のイラク行きが地域の住民から烈しい反対を受ける心配もあった筈である。しかしこの心配は市長以下大多数の人々からの支持を意味する多くの行事を経て心配は霧散したのであるが更に留守家族慰問の心配りを聞いた現地派遣隊員はそれこそ心の底から安堵したに違いない。

隊員が任務を終え帰国に際して感激したものの一つに「駐屯地での出迎えた日があるという。旭川から名寄に着く頃は日暮り、隊員の列が出迎えたのであるが、その中に協力会、隊友会、父兄会、家族が並んでいた姿には涙ぐみ、ものを抑えるのに苦労したと云う。そしてその出迎えは三次に分かれた帰国の全てに同じく行われたのである。首長など職務にある人々の多忙さを考へるとその力のいれ具合が自ずと分かってくる。このような協力団体にはその活動の中心となっており、その中から一人を紹介したい。お名前を吉田美枝子氏と云い、ご主人は病院の院長であられた。ご夫妻共々、長い間駐屯地に対してご協力を頂いて来た方であ

り、お年を召した方と聞く。はるか離れた土地から永いご健康をお祈りしたい。

分屯地叙述に代えて

名寄駐屯地は稚内と札文に分屯地を持って居る。そこは暴風に劣らない烈しい風が吹き荒れる土地であり、その烈しい風を衝いて日夜休み無く務めについて居るのである。この二つの分屯地の叙述については割愛するが稚内には別に魂の国守の印がある。

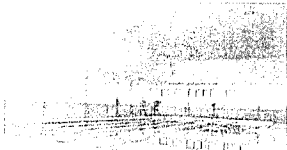
稚内市外の丘の上にある碑である。多くの方がご存知であろう。碑銘は「水雷の門」、先の大戦が終了した後にソ連軍は理不尽にも樺太に侵攻して来た。その折、樺太真岡郵便局に交換手として勤務していた女性達が侵攻の状況を最後まで伝えて職務を全うし、最後は青酸カリを呷って自決された悲劇があつたことは映画にもなり、最近も靖國神社遊就館で上映されていた。

青酸カリを飲み下す瞬間、何を思われ何を念じられたのだろうか。家族への別れの言葉、愛しい人への別れと何時の日のかの冥界での再会、そして当時の日本人の祖国愛を象徴する一般的表現、「天皇陛下 万歳」等を叫びながら一気に喉に流し込まれた姿を想像するのである。命の際の肉親愛、祖国愛の心の底からの叫びは宗谷岬の突

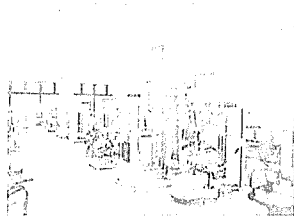
名寄レクリエーションセンター



レクリエーションセンター全景

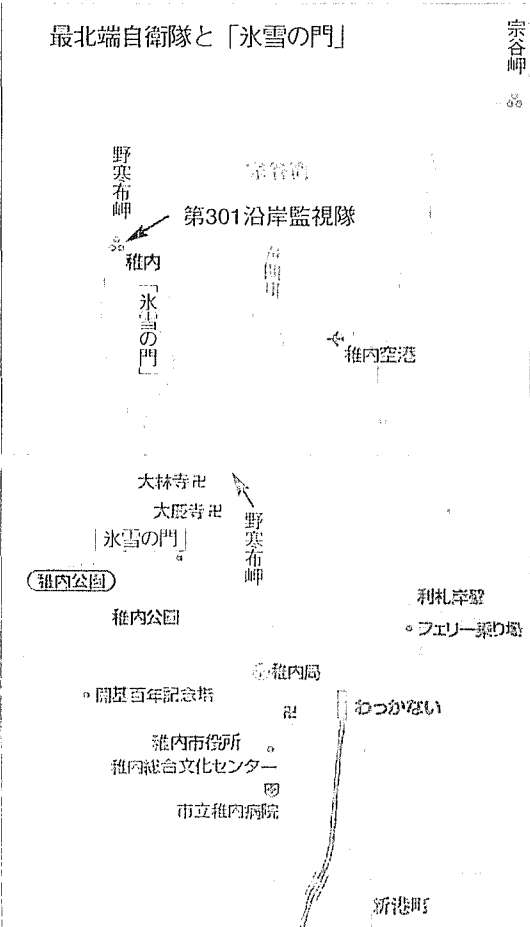


温水プール



健康維持室

最北端自衛隊と「氷雪の門」



御霊の念と一緒に名寄駐屯地の空をも覆っている気がしてならないのである。
終わりに三つの事をお祈りしたい。一つは、今も変わらず国防の最前線を守るべく精進を重ねる駐屯地ご一同の益々のご健勝であり、二つには、長年駐屯地を温かく支援して頂いた名寄市を初めとする各市町村行政の揺るぎないことであり、三つには市町村民皆様のご多幸である。今回本稿を書き進めるに当たり、名寄駐屯地広報班長浜口朗伸氏からいろいろお話を聞いて駐屯地にとって地域の行政機関と住民の

方々の支援の有り難さを実感した次第である。
また、筆者の防衛大学校時代の教官大東信祐氏（元業務学校長、陸自57）、新任幹部時代秋田BOQ時代の一年先輩大越兼行氏（元第2師団長、北部方面總監、陸自63）、現階行社事務局副長松田純清陸自63氏から名寄部隊への熱い心の籠ったヒントを頂いた。この取材を通じて名寄市と名寄駐屯地のファンになってしまった事を不思議に思っている。
文責 松村興延 陸自64